

エリナ・ハーヴィオ・マンニラ著
橋本紀子・森口藤子・橋本美由紀訳

『仕事と家族と幸福感』

北欧・東欧5大都市の比較調査』

評者：高橋 睦子

本書は、ヘルシンキ、ストックホルム、コペンハーゲン、タリン、モスクワという5つの首都で暮らす30～45歳の技術者、教員、工場労働者たちを対象とし、仕事や家庭についての幸福感を調査した比較研究である。「幸福感」の研究は曖昧さをともないがちであるが、本書は、職場と家庭における人間関係に関するアンケート調査を中心に収集された膨大なデータをもとに、職業、都市、ジェンダーという3つの独立要因といくつかの従属要因（仕事、家族、幸福感の指標）とから多重分類分析を行った労作である。仕事における男女の統合と人間関係（4、5章）、家族と仕事（6章）、幸福感（7章）、社会構造から個人の幸福感に至る回路（8章）といった構成によって、個人レベルでの幸福感について都市や職場との関連から解釈を試みている。

この研究は、当初、フィンランドとエストニアの比較を目的として着手され、その後さらに多くの国が研究対象に含まれることになった。北欧社会と旧ソ連社会について労働、家庭生活の類型および幸福感についての比較について、ともすると政治的な相違が決定的であるかのように連想しがちである。しかし、本書の核心は、経済的および文化的な相違こそが重要であり、

都市の近代化の程度が労働や家庭への満足度に大いに影響すると指摘している点にある。

1 職場の人間関係と幸福感

本書でも引用されているように、フィンランドの社会学の指導者のな存在でもあるエリック・アッラルト（Erik Allardt）は、幸福の3つの領域として愛すること、所有すること、存在することを指摘している。愛することには、あらゆる暖かな人間関係や感情が含まれ、仕事はそうした親密な人間関係の形成機会を提供する。この意味で、職場の人間関係は人の幸福感を語る上で不可欠な要素として位置付けられる。本書の著者エリナ・ハーヴィオ・マンニラ（Elina Haavio-Mannila、ヘルシンキ大学名誉教授）は、1960年代に『フィンランドの男性と女性』という著書を皮切りに、ヘルシンキ大学社会学科を拠点に研究活動を展開し、フィンランドの女性学の発展にも大きく寄与してきた。1980年代後半から1990年代初めにかけて、職場の恋愛関係をテーマとする研究をフィンランドについて行ない、本書では、さらに国際比較へと研究対象を拡大している。彼女の研究の軌跡からすれば、本書で第5章「仕事における人間関係」に多くの紙面を割き深い議論が展開されていることは当然でもある。

研究対象の職業グループはジェンダーに配慮して選定されている。技術者は男性が多数を占め、教員（幼稚園または小学校）では女性が支配的であり、工場労働者は男女比の均衡がとれている職業を代表している。これら3つの職業の特徴として、ジェンダー構成だけでなく、職業の威信にも注目することで、仕事、家族、幸福感についての職業間の差異が分析されている。技術職がもっとも職業的威信が高く、工場労働がもっとも威信が低いとされ、後者の幸福感は家庭生活での満足度によって部分的に補われている。

3つの職業、4つの都市（モスクワを除く）そしてジェンダーといった説明変数のうち、ジェンダーは他の説明変数ほどには仕事、家族、幸福感の指標と統計的に有為に関連してはいないと指摘されている。それでも、職場の人間関係の分析ではジェンダーの影響に注目しながら、職場の雰囲気への認識、態度、行動と感情が浮き彫りにされている。派閥、ねたみ、協力、援助、友情などに加え、タッチング、男女の友情と性愛、男女間のたわむれへの態度の尺度を軸に性愛的関係のありようについても踏み込んでいく。淡々としたデータ分析でありながら議論はスリリングに展開し、職場の人間関係のデリケートな側面を多角的に論考しようとする社会学者ハーヴィオ・マンニラ博士の姿が彷彿とする。

タッチングは、皆無であれば子どもだけでなく大人も疎外感に苦しむが、また逆に、個人への攻撃やセクシュアル・ハラスメントになることもある。北欧社会では公の場面で家族や恋人以外の人たちとの身体接触は稀である。それでも、同僚間の性的ニュアンスのない身体接触への態度は概して肯定的であり、とくに教員は他の2つの職業グループよりも身体接触が習慣的であった。こうした身体接触に対して否定的な態度は工場労働者の男性たちに特徴的であり、労働者の職場文化には身体接触は含まれないという仮説との合致が指摘されている。

本書が指摘するように、ジェンダーの視角による職場の人間関係の研究は、近年セクシュアル・ハラスメントに集中しがちであり、その他の性愛・性的行動についての研究は少ない。本書でもセクシュアル・ハラスメントに関する議論が行なわれているが、本書の独創性はセクシュアル・ハラスメントのみに限定するのではなく、その他の性愛・性的行動に注目している点にある。ともすると議論の対象として正面から

扱われることの少ない性愛的行動の一側面としての男女間のたわむれについての態度尺度を分析するために、本書では独自に尺度が設定されている。つまり、3つの質問文（私は職場での軽いたわむれを楽しむ、もしだれかが職場で私に性的関心を持つのなら嬉しいと思う、私は職場でのたわむれや気をひくしぐさをすることが好きだ）への回答が態度尺度とされた。明らかにセクシュアル・ハラスメントだと断定できないような状況でも、男女間の友情が過度に性的なものに近づけば、それは性的な負担感となり当人にとってストレスを引き起こす原因になることは言うまでもない。

ここでいう職場でのたわむれとは多義的であり、性的関心にとどまらない。むしろ、性別役割の職場へのはみだしをも含み、これは、本来は仕事とは関係がないような家庭・社会生活上の性別役割が、仕事の役割にまで及ぶことをいう。本書は、同僚間の協調や友情がどの程度ジェンダーやセクシュアリティに関わり、どのように解釈・評価されるか、という複数の境界線の微妙な交差を解読しようとしている。北欧の首都では、仕事でのたわむれのうち、とくに、性別役割の職場へのはみだしに対する強い拒絶が指摘されている。また、男性は職場でのたわむれについて比較的寛容であるが、女性は性的関心と仕事との混同について男性よりも批判的であるという。職場での性愛から軋轢が生じる時、女性の方が男性よりも否定的な結果に直面しやすい。こうしたことから、女性が職場進出を遂げた北欧においても、女性と男性の対等な関係は未達成であることが示唆される。

2 家族、仕事、幸福感

「家族と仕事」についての第6章では、カップルの社会的地位と家庭での家事の分担との関連が議論されている。北欧と旧ソビエト連邦では、大半のカップルが共に賃労働に従事し、労

働力への参入という点ではジェンダーによる差異はほとんどないが、家庭においては、男性が唯一の稼ぎ手であった時代の性別役割分業の名残がみられる。女性がより多くの家事をしているのはタリンとモスクワについて顕著であり、北欧に比べ旧ソビエト連邦の方が両性間の不平等が大きいとも指摘されている。本書は、近代的な都市であるほど家庭におけるジェンダー平等があるともされ、北欧のような近代的な家族の形態が他の諸国にも普及すれば、世界的に両性間の平等が増大していく可能性も大きいと述べている。

仕事と家族との要求のバランスがとれているかどうか、幸福感に大に関わる問題である。仕事と家庭の両立について社会が真剣に取り組んできたかどうかによっても、仕事が入り込むことへの寛容度が異なるようだ。タリンとモスクワでは、仕事のために家族が不満をもつことが一般的であるが、コペンハーゲンをはじめとする北欧の首都では稀であった。家族と仕事への打ちこみ方については、ヘルシンキでの調査からは、社会経済的に上位の女性は同等の男性よりも、また、社会経済的に低位の男性は同等の女性よりも仕事に打ちこむ傾向があると報告されている。本書は、社会的に地位の高い男女に対して社会が要請することは異なり、女性は仕事への献身を、男性は家庭への理解をそれぞれ強調する必要があると指摘している。

第7章「幸福感」では、幸福感について、自尊感情と仕事の満足感という主観的幸福感とストレス症状の数値と頻度で示される客観的幸福感という二つの側面から議論されている。自尊感情が最も高いのはコペンハーゲンで、最も低いのはタリンであった。職業と都市、職業とジェンダーでは自尊感情についての関連が指摘され、自尊感情はヘルシンキとストックホルムの教員では非常に高く、ヘルシンキの女性労働者

では非常に低いとされる。ストレス症状は、タリンの女性やモスクワの男性の間で頻度が高く、生活の質についての問題の存在を示唆している。

第8章「社会構造から個人の幸福感に至る回路」は、どのような社会的な条件が個人の生活の質を高め幸福感に貢献するかという核心の問題についての論考を展開している。職場の雰囲気やなごやかさについて、職場に性的負担感がないことや仕事の自律性との関連が指摘され、これらに加えて、さらに、職場で差別されているという感覚がないことが仕事での大きな満足感につながると説明されている。また、本書の仮説では、仕事が家族関係に影響し、家族の機能が結婚の質を左右するという。幸せな結婚にもジェンダー・ギャップがあり、男性にとっては仕事に恋愛をしないことであるが、女性にとっては家庭で家事が比較的平等に分担されることと関連するとされる。

3 気付きの諸点

本書は洗練された分析と議論を簡潔に記す著述スタイルであるため、本文約130頁というかなりコンパクトな研究報告となっている。それでも、随所で多様な仮説や説明が示され、知的刺激には事欠かない。本書では、個人に幸福感をもたらす社会的条件を説明することを研究課題として主に人間関係に注目している。そのため、北欧や旧ソビエト連邦の5つの首都そのものの特徴については詳細な議論は提供されていない。読者に著者と同等の知見が期待されているのかもしれない。5つの首都すべてについて必ずしもデータが揃わないことはやむを得ないとしても、モスクワやタリンに関するデータがところどころ欠落しているのは残念である。また、都市の近代性が職場の文化や家庭での家事分担にも影響するであろうことは推察できるが、この近代という概念について本書は深入り

を避けたようでもある。この点と関連して、1992年に原著が刊行された本書の研究データは1985年から1988年にかけて収集されたものであり、かなりの歳月が経っていることは否めない。1980年代末の冷戦の終焉や1990年代前半のスウェーデンやフィンランドでの経済不況と福祉国家の危機といった大きな変化を経た今日からすると、5つの首都の近代性も大いに変容したはずであろう。それでも、本書は、社会構造や政策研究では直接に議論されることの少ない人の幸福の鍵を探究し、職場や家庭といった生活環境や人間関係についての満足感の解明に努めている点で、福祉レジーム論とは異なるアプローチでの国際比較研究の成果でもある。フィンラ

ンドをはじめとする北欧諸国では、福祉国家が市民生活に多様な社会サービスや社会給付を供するに至り、福祉国家のサービス国家化が進んでいる。しかし、人の幸福感は福祉制度によるサービスだけでなく、より直接的な人間関係に大いに左右される。本書は、制度や政策研究だけでなく人間関係についての研究の意義を再認識させるものである。

(エリナ・ハーヴィオ・マンニラ著 / 橋本紀子・森口藤子・橋本美由紀訳 『仕事と家族と幸福感 - 北欧・東欧5大都市の比較調査』大月書店、2001年12月刊、134頁、定価2,800円 + 税)

(たかはし・むつこ 島根県立大学教授)

法律文化社

〒603-8053 京都市北区上賀茂岩ヶ垣内町71 * 価格は本体(税別)
☎075(791)7131 http://web.kyoto-inet.or.jp/org/houritu/

最新刊

雇用関係の変貌

「社会政策学会誌第9号」

社会政策学会編

▼共通論題II雇用関係の変貌

雇用関係の変化をどのようにとらえるか……………森 建資

パートタイムの基幹労働化について……………脇坂 明

労働者派遣の拡大と労働法……………中野麻美

働き方の変化と労働時間管理弾力化……………佐藤 厚

▼テーマ別分科会II報告論文

コミュニケーション報告論文……………福井祐介

公的年金制度と脱貧困化……………鎮目真人

ソーシャルワークの視点からみた介護保険制度の位置づけとその諸問題……………森 詩恵

現行労働者派遣法の問題点と派遣労働者の権利……………藤井とよみ

中国農村年金保険制度の誕生・衰退と再建……………王 文亮

▼投稿論文

戦後日本の男性熟練労働者像とその評価……………宮下さおり

建設不況下における元請・下請関係の変容……………小関隆志・村松加代子・山本篤民

イタリア、ボローニャ市の高齢者福祉政策の展開……………宮崎理枝

家計のジェンダー化と貧困測定……………室住眞麻子

第7号 経済格差と社会変動……………●3000円

第8号 グローバリゼーションと社会政策……………●2900円

欧米のホームレス問題(上) ●実態と政策……………●4500円

小玉徹・中村健吾・都留民子・平川茂編著……………●4500円

英・独・仏・米・EUのホームレス生活者の実態と支援の政策・制度を全面的に展開。問題の捉え方や正負双方の経験から学ぶ。

(下)支援の実例(今秋刊)人に対する支援活動や組織の構造を紹介。

行動する失業者 ●ある集団行動の社会学……………●2800円

D・ドマジエール M・T・ピニョニ / 都留民子監訳……………●2800円

97-98年冬にフランスの失業者たちが起こした大行動を素材に

実態調査、行動にいたる過程、集団行動を分析し、課題を提示。

行動する失業者……………●2800円